

# 学生と教員の見方



【アピールポイント】  
大学では1級建築士  
取得に向けて日々勉強  
に励んでいます。趣味  
はデイズニーとポーリ  
ングです。

【学生の見方&考え方】  
(4年 木谷信汰)

近年、地震や豪雨などの

自然災害による避難生活の

中で亡くなる「災害関連死」

が問題となっている。特に

都市の郊外は、医療・交通

・地域コミュニティの基盤

が弱く、避難生活の長期化

が失命に直結する可能性が

高くなる。ゼミでの

調査から見えてきた。

## 地域と公共施設②

などの設備が整っていない

ケースも多い。結果として、

自宅にとどまるしかない人

が増え、孤立が災害関連死

の一因となっている。

そのような現状を課題と

捉え、ゼミの中で廃校を活

用した多機

能型防災拠

点の整備を

提案した。

狙いをもった「命を守る拠

点」とした。

調査や提案を通じて感じ

たのは、「避難所は非常時

だけの場所」という考え方

の限界である。日常的に使

点づくりが求められる。

われない施設は、いざとい

う時に使いにくく、地域の

人の足も向かない。むしろ、

日常的に人が集まる場所こ

余剰資産ではなく、地域住

民の命を守る拠点へと再生

できる可能性を持つ。人口

減少が進む郊外だからこ

そ、遊休不動産を活用し、

日常と防災を一体化した拠

点づくりが求められる。

【教員の展開】

(秦瑞希講師)

地域と公共施設」のテ

ーマで双方の関係を検討し

平成の大合併を境に統廃合

が加速した。26年現在、役

割を終えた廃校のうち約2

000校が未活用のまま残

されている。これは単なる

施設数の問題にとどまら

ず、地域に点在する公共資

源の空洞化を示している

とされている。

廃校活用は全国的な課題

として注目され、多様な事

を担っていたが、統廃合に

よってその機能とともに地

域との関係性も失われた。

この視点に立てば、廃校活

用には新たな関係の再構築

が不可欠である。その一つ

の方向性が、木谷くんの提

案する「命を守る拠点」へ

の転換である。

東日本大震災以降、避難

所には長期滞在や生活の質

が求められるようになった。

廃校は、平常時には地

域に開かれた施設として機

能し、非常時には防災の拠

点となるポテンシャルを持

つ。さらに、日常的な利用

を通じて地域との関係を維

持することで、災害時にも

有効な拠点となり得る。

廃校の活用は、単なる施

設の再利用ではなく、地域

### 廃校を「命を守る拠点」に 日常利用と 一体化した 防災施設の 可能性

もと地域の中心にあり、広  
い敷地や体育館、給排水設  
備などを備える。平常時に  
は、交流施設やカフェなど  
として活用し、住民が日常  
的に集まる場所にする。災  
害時には避難所として機能  
する空間構成とし、迅速か  
公共施設は、行政の単なる

我が国の学校数の減少は  
1980年代から始まり、  
学校の本来、地域コミュ  
ニティの中心としての役割